第２章

方　法

第２章　方法

本研究においては、分析に当たって、「人間の行動の説明と予測に有効であって、同時に、研究者にあってその意義が明確に確認されている研究テーマによって限定された範囲内における説明力に優れた理論（木下，2003a)」の生成に有効とされているグラウンデッド・セオリー・アプローチをもとに実践的な活用を視野に入れ開発された修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（以下、「修正版 M-GTA」という。）を用いることとした。ここでは、まず修正版 M-GTA の概要について説明し、次に本研究において修正版 M-GTA を採用した理由を記述した上で、本研究の方法について、具体的な説明を加えた分析手順も含めて述べることとする。

第１節　修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（修正版 M-GTA）について

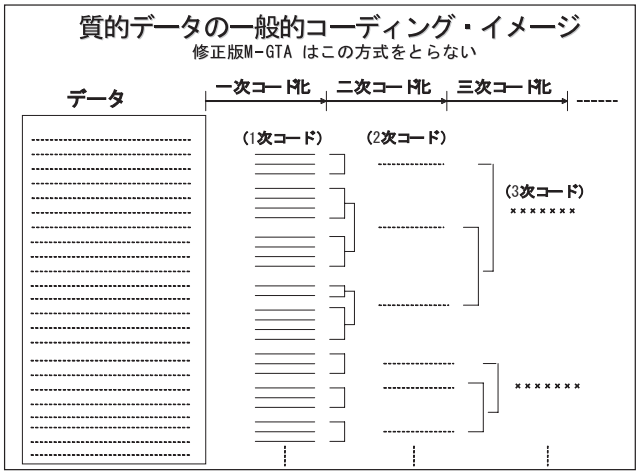
１　概要

グラウンデッド・セオリー・アプローチについては、戈木（2006）は、著書「グラウンデッド・セオリー・アプローチ　理論を生み出すまで」の中で、質的研究のおもしろさは、「データ収集やデータ分析の過程の中で、もともとの自分なら考えつきもしなかった"発見"にたどり着けることとし、『そんなことは誰でも知っているよ』という現象にも、構造やプロセスが明らかにされていないものが多く、明らかにすることには意味があり、新しい発見である」と述べている。グラウンデッド・セオリー・アプローチは、データに現れたある事例の状況を知ることではなく、データを通して、その現象の構造とプロセスとを把握し、他の事例にも応用できるような理論を作り上げることを目標としている。

グラウンデッド・セオリー・アプローチに適した研究領域として、これまで、人間の相互作用にプロセス性を伴っている医療・看護・保健・リハビリテーションやソーシャルワーク、臨床心理、教育といった対人援助に関わる実践領域において関心が高まりを見せてきていると指摘されている（木下，2003a)。修正版 M-GTA を用いた研究としては、看護学領域においては、宮坂（2005）が、ガン治療後の通院患者に対してインタビューを実施し、当事者の現在に至るまでの経験や思いを明らかにしており、柴（2005）は、小児看護学実習を受けている学生を対象に、学生と受け持ち患者との関係形成のプロセスを明らかにしている。教育現場を対象とした研究では、徳舛（2005）が、若手小学校教師を対象として、教師としての実践を通してどのように学習していくのか、さらに、認知に基づいた学習過程のモデル作成を目的に研究を行っている。就労支援関係では、若林（2008）が就労支援専門家及び企業現場の担当者等に対してインタビューを行い、ナチュラルサポートの形成過程について研究を行っており、また、栗田（2008）は、ひきこもり状態にある就労希望者に対して、就労に向けてたどる心的プロセスを明らかにしている。このように、人間の相互作用の現象を明らかにすることに焦点を当てた研究において、この分析手法が注目されてきている。グラウンデッド・セオリー・アプローチの理論については、若林（2008）が理論特性や内容面の特性について整理しているため、詳細な記述は割愛し、本研

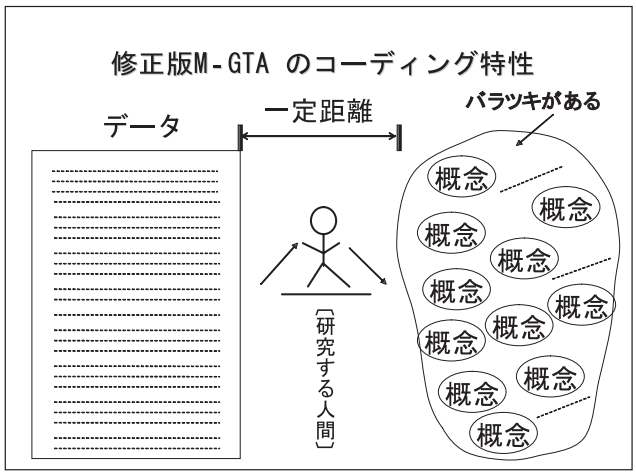
究では、修正版 M-GTA についての特徴の概要に絞って述べることとする。

グラウンデッド・セオリー・アプローチは、研究者の分析方法に対する考え方の違いから 4 つのタイプに分けられる（オリジナル版、グレーザー版、ストラウス・コービン版、修正版 M-GTA）。ただし、修正版M-GTAもその他のタイプも、基本的な立場は共通しており、修正版M-GTAを提唱した木下（2003a）も、共通した基本的な分析方法として「グラウンデッド・セオリー・アプローチは、データに密着した分析から独自の理論を生成する質的研究法であること、分析では、コーディング方法としてのオープン・コーディングと選択的コーディング、継続的比較分析、理論的サンプリング、分析終了の判断基準となる理論的飽和化の 5 点が不可欠な条件」と述べている。その上で、修正版 M-GTA は、オリジナル版を基本としつつも、分析方法における課題点に対して改めて検討を行い、より分析しやすい方法を提唱している。修正版 M-GTA の独自な方法として、具体的には、まず、データの切片化をしないということが挙げられる。他の 3 タイプでは、切片化がコーディングを行う上で重要なポイントになっているが、データを基にコードを層化させながら分析を進めていくことによって、データからの分離があいまいになり、また、分析方法としても明確に明示されていないという課題があった。そのため、グラウンデッド･セオリー･アプローチでは、一般的コーディングの方法で研究が進められている例も少なくない（木下，2003a）。一般的コーディングは、図 2-1-1 に示しているように、データをコード化し、相互の関連性を明らかにしながらさらにコード化を進め、分析結果としてまとめていくことであり、グラウンデッド・セオリー・アプローチが条件として挙げている継続比較分析や理論的サンプリング、理論的飽和化を行うことが難しい。



（出典「M-GTA グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践 質的研究への誘い」木下(2003)）

図 2-1-1　質的データにおける一般的コーディング・イメージ



（出典「M-GTA グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践 質的研究への誘い」木下(2003)）

図 2-1-2　修正版 M-GTA におけるコーディング・イメージ

そこで、木下（2003a）は、図 2-1-2 のように、修正版 M-GTA での独自のコーディング方法として、研究する人間（分析する研究者）の視点を踏まえて「データを切片化するのではなく、データに反映されている人間の認識、行為、感情、そして、それらに関係している要因や条件などをデータに即して丁寧に検討していく。」方法を提案している。修正版 M-GTA では、データから解釈した結果を「概念」

という用語で表しており、コードを層化させるのではなく、データと「概念」との直接的な関係性を保つことで、grounded on data として分析を進めることができるとしているのである。この独自のコーディング法では、「概念」を分析の最小単位としており、分析ワークシートを作成することでデータに密着した分析を進めることが可能となるように開発されている（分析ワークシートの作成については、第2節の分析方法で詳しく説明する。）。また、修正版 M-GTA は、「概念」を生成する際に類似例や対極例も同時に検討を進めながら、並行して、概念同士の関係性や未生成の概念をも検討し、「推測的、包括的思考の同時並行により理論的サンプリングと継続的比較分析を実行しやすく」している（木下, 2003a）。修正版 M-GTA では、分析の最小単位である概念を生成することによって、すでに生成された概念との関係性や比較を行うことが容易になり、動きが見やすいという特徴があると思われる。

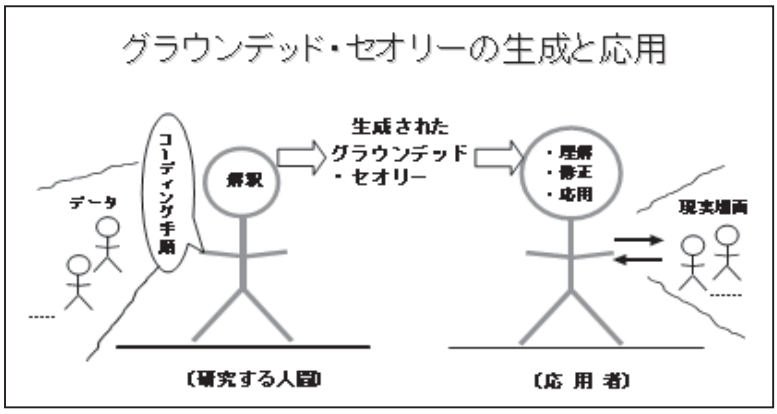
さらに、グラウンデッド・セオリー・アプローチは、対人援助に関わる実践領域での実践的な活用を促す理論として述べられているが、特に修正版 M-GTA では、この実践的な活用を視野に入れた研究という点を重視し、「実践的な活用のための理論生成の方法である」と木下は規定している。修正版 M-GTA では、分析結果が実際の現場で応用されることによって検証することができ、さらに、現場で実践され、必要な修正がなされることによって、より活用可能な理論として成り立つことが可能となるのである。

以上、修正版 M-GTA の特徴について概要を述べたが、修正版 M-GTA の分析手法に関する考え方については、若林（2008）によって文献の中で詳しく説明されていることから、そちらを参考にしていただきたい。

２　本研究において修正版 M-GTA の分析手法を取り入れた理由

修正版 M-GTA の分析手法を取り入れた理由としては、概要で述べたように、修正版 M-GTA が人間の相互作用の現象について、理論を持って明らかにすることができ、特に分析方法の明確さと実践的活用を重視しているという点において本研究の目的に合致していることが挙げられる。さらに、本研究の目的を達成するために修正版 M-GTA を用いることによる有効性という観点から検討を行い、以下の 4 点の有効性を見出したことも併せて挙げられる。

有効性の 1 点目としては、支援者の認識と考え方を具体的に明らかにすることができるということである。質的研究法では、「自然な場」で「自然に生じている現象」について調査を行うため、現象や出来事などのプロセスを明らかにすることが可能となり、研究テーマについて豊富で詳細な描写ができるとされている。本研究でも、質的研究の中でも多く活用されている面接法（インタビュー）を実施することによって、統合失調症者の就労支援が実際にどのように実施されているのかについて、支援者の率直な認識や考え方がデータに反映されると思われる。2 点目としては、インタビューで得られた認識や考え方を可視化することができるということである。修正版 M-GTA は、データを最終的には結果図と記述説明で理論を構築していくことを目指している研究法である。結果図に表すことによって、相互作用も含めた支援の構造や動きを視覚的にわかりやすく提示することができるとともに、記述説明によっ



（出典「M-GTA グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践 質的研究への誘い」木下(2003)）

図 2-1-3　グラウンデッド・セオリーの生成と応用

て、これまで暗黙知とされていた就労支援のノウハウが明文化されるという点で有効と思われる。3 点目としては、修正版 M-GTA が実践者を念頭においた研究法であることから、現場により還元しやすい方法論であるということである。図 2-1-3 に示すように、データが収集された就労支援の現場と同じような場面に分析結果を還元することによって、現実的に試行することが容易に可能となり、研究によって得られた分析結果が実際の現場で理解・検証され、さらには応用されることに繋がると思われる。4 点目としては、修正版 M-GTA では 1 つのインタビューデータであっても、様々な視点から問題点を明らかにすることができるということである。木下（2003a）は「分析テーマは一つの調査データに対して複数設定されることもある。」と述べている。インタビューデータ自体が豊富な情報で成り立っていることから、1 つの研究テーマに対していくつかの分析テーマを設定することが､包括関係として成り立つということである。すなわち本研究のように、統合失調症者の就労支援というかなり広範囲な内容の情報を収集した場合に、異なる視点による分析の視点をいくつか設定することによって、明らかにしたい問題点に絞った分析ができると同時に、動きを捉える分析を行うことによって、多様な形の展開を明らかにすることが可能になると考えられる。

以上の観点から、本研究では修正版 M-GTA を採用することとした。

第２節　本研究の方法

１　調査対象者

統合失調症者を対象に、独自の「就労支援プログラム」に基づき、就労支援を実施している機関において、一定年数以上の就労支援経験をもっている支援者 17 名である。

（１）調査対象の範囲

調査対象者の所属する施設等は以下の３種類を選定した。現在、統合失調症者を対象として行われている就労支援の枠組みを網羅すべく、調査の対象としたものである（表 2-2-1 参照）。

a. 障害者職業センターにおける職業準備支援のような基礎的な労働習慣の習得等を目的のひとつとするトレーニングなど、就職活動以前に施設内でのトレーニングやプログラムを実施しているところ

b. 施設内でのトレーニングやプログラムではなく過渡的雇用のようなオンザジョブトレーニングを実施しているところ

c. IPS モデル（Individual Placement and Support：個別就労支援モデル）に準じた支援を実施しているところ

ただし、a と b については、いずれかのみを行っている施設と両方を併せて行っている施設がある。

表 2-2-1　調査対象者の概要（範囲）

支援者	性別	経験年数	所属施設の種類	就労支援のためのプログラムの特徴
A	女	20	障害者就業・生活支援センター	施設内トレーニング（有期限・更新無）・ジョブコーチ
B	男	8	障害者就業・生活支援センター	〃
C	女	5	就労移行支援事業所	〃
D	女	10	小規模授産施設	施設内トレーニング（有期限・更新有）・ジョブコーチ・過渡的雇用
E	男	22	クラブハウス	〃
F	女	23	就業・生活支援センター	〃
G	男	7	就業・生活支援センター	施設内トレーニング（有期限・更新有）・ジョブコーチ・グループ就労
H	男	6	就業・生活支援センター	〃
I	女	4	指定障害福祉サービス事業所	〃
J	女	8	就業・生活支援センター	〃
K	男	13	障害者職業センター	施設内トレーニング（有期限・更新無）・ジョブコーチ
L	女	12	障害者職業センター	〃
M	女	25	障害者職業センター	〃
N	女	14	障害者職業センター	〃
O	女	6	精神科病院	IPS
P	女	3	クラブハウス	〃
Q	男	10	クラブハウス	施設内活動（無期限）・ジョブコーチ・過渡的雇用

（２）経験年数

調査対象者の経験年数は、平均 11.5 年（計 196 年 ÷ 17 人 =11.5 年／経験年数の範囲は 3 年～25 年）であった。

「一定年数以上の就労支援経験」については、研究開始当初は 5 年程度を想定していたが、IPS モデルによる支援機関については、就労支援としてはまだ新しい取り組みであることから就労支援経験としては短い支援者も存在していることがわかった。本研究が、統合失調症者の就労支援を網羅的に把握す

る必要があることから経験年数の範囲を広げ、就労支援経験としては短い支援者においても調査の対象としている。

（3）倫理的配慮

調査対象者には、インタビューを行う前に研究の趣旨を説明し、目的や方法等の内容に対して同意書に署名を得た。

また、個人情報は保護されること、研究成果についての公表は個人を特定できる情報は公表されないことを約束している。

2　調査方法

（1）調査期間

調査期間は、平成 19 年 6 月 22 日～平成 20 年 1 月 25 日であった。

（2）データ収集方法

グラウンデッド・セオリー・アプローチの特徴は、フィールドワーク型調査に最も適合的であるが、現在実際にこの方法が用いられているのは面接型調査が圧倒的に多く、修正版 M-GTA では、面接型調査を前提として考えられている（木下，2003a)。本研究においても、インタビュー形式によるデータ収集を行うこととした。

データ収集方法としては、研究員が調査対象施設を訪問し、調査対象者 1 人当たり 1 時間から 1 時間半程度の半構造化面接を実施した。面接（インタビュー）の内容は、支援者が日常的に行っている実践活動を具体的に話してもらう必要があることから、「統合失調症者の就労支援で、いつもどんなふうにされていますか？」という問いかけを中心に、自由に語ってもらった。研究員はインタビューガイドを準備し、できるだけ就労支援の内容が幅広く聞き取れるように挿入質問を行った。内容は、調査対象者の承諾を得て、IC レコーダーに録音した。

3　分析方法

インタビューの内容は、逐語録としてデータ化した。データは、調査対象者 1 名当たり、A4（約 1200 文字）12 枚から 35 枚である。データの分析は、前述の修正版 M-GTA を用いて行った。修正版 M-GTA では、データを分析する際に、分析テーマと分析焦点者を念頭に置きながらデータの内容に着目する必要があるとしている。よって、分析方法に関しては、（1）分析テーマの設定（2）分析焦点者の設定（3）データ分析手順の順で説明を行う。

（1）分析テーマの設定

修正版 M-GTA では、研究テーマ全体について分析を進めると、データに密着した分析が難しくなることから、研究テーマに関して、密着して分析しやすいところまでテーマを絞り込むことを推奨し、絞り込んだテーマを分析テーマとしている。本研究では、目的のところで述べたように、精神障害者、特に統合失調症者の就労支援が時系列的にどのように展開されているのか、また、就労支援を展開してい

く上で、支援者が当事者に対してどのような判断と支援行動を行っているのか、さらに、精神障害者に対する対人援助の際に重要となってくる当事者の意思決定に関する支援がどのように行われているのかについて明らかにしたいと考えた。よって、以下の３つの視点を分析テーマとして設定した。

「統合失調症者の就労支援の展開プロセスの分析」

「統合失調症者の就労支援における支援者の支援行動のプロセスの分析」

「統合失調症者の就労支援における意思決定を支える支援プロセスの分析」

（２）分析焦点者の設定

修正版 M-GTA では、分析焦点者については「分析結果の中心に位置する人間」としている（木下，2003a）。分析焦点者は、研究目的に沿った対象者に焦点を当てており、通常は面接の対象者となる。本研究では、３つの分析テーマすべてについて、独自のプログラムに基づいて統合失調症者の就労支援を実施している施設において一定年数以上の就労支援経験がある者を分析焦点者とした。３つの分析テーマの中心に位置する人間として、調査対象とした就労支援者は、共有すべきノウハウを多く持っていると考えられたからである。

（３）データ分析手順

質的データを分析する場合は、データがどのように分析され、結果を導き出したのかについて不明確である場合、恣意的な解釈に陥っているのではないかという懸念が生じてくる。そこで、修正版 M-GTA では、分析の手順を明確にするために７つのポイントを提示している（木下，2003a）。以下、そのポイント（＿＿で示す）に沿って分析手順を説明する。

① 分析テーマと分析焦点者に照らして、データの関連箇所に着目し、それを一つの具体例（バリエーション）とし、かつ、他の類似具体例をも説明できると考えられる、説明概念を生成する。

すなわち、概念の生成では、ただ単に逐語録のデータから関連したキーワードのような単語を切り取って分類するのではなく、分析テーマに対して意味のある話をデータからいくつか拾ってくる中で、意味を凝縮した概念として生成する必要がある。

実際の分析では、データの中から、統合失調症者の就労支援を行う上で、就労支援者にとって意味のある行動だと思われる箇所を注目することとなる。例えば、就職の面接に際して、支援者側は事業所に伝えるべきことと伝えるべきでないことを整理して面接に臨む方が良いと提案してもその提案が受け入れられなかった場合の支援者の言葉として、

「そうですね。そうなると、本人が可能な範囲でというか、あのー、やはり伝えることは限定して、本人から伝えていただくっていうことは、一つの方法だと思うんですね。でその結果としてまあ不都合が生じた場合にどうそれをフィードバックするかっていうところが非常に大切だと思いますので、まあ、伝えなくて支障が出た、じゃあ今後どうしてったらいいと思いますかっていうところであったりを、その都度振り返っていくというような形をとっています。」

というデータが存在する。そこで、就労支援を行う際に支援者の行動として意味のある箇所として、上記データに引いた下線部をバリエーションとして抜き出すこととした。そのバリエーションに類似す

る具体例をも説明できるような概念を生成する。

② 概念を作る際に、分析ワークシートを作成し、概念名、定義、最初の具体例などを記入する。

概念を生成するために、修正版 M-GTA では分析ワークシートを開発している。分析ワークシートは、概念名、定義、バリエーション、理論的メモで構成されている。①のように、データから意味のあると思われる箇所を取り上げ、バリエーション欄に転記する。そのバリエーションをもとに定義を意味付けし、その定義に命名したものが概念名である。

概念１：振り返りをしていく

定義：その時々の状況について当事者とともに振り返る

バリエーション
① でその結果としてまあ不都合が生じた場合にどうそれをフィードバックするかっていうところが非常に大切だと思いますので、まあ、伝えなくて支障が出た、じゃあ今後どうしてったらいいと思いますかっていうところであったりを、その都度振り返っていくというような形をとってます。（L P1L19）

図 2-2-1 分析ワークシート作成例（ポイント②）

実際の分析では、図 2-2-1 で示しているように、①で抜き出したバリエーションを分析ワークシートのバリエーション欄に転記し（オープン・コーディング）、そのバリエーションや類似する具体例を推測しながら（他のシチュエーションにおいても「振り返る」という行為を支援中に行うことは考えられる）データを深く読み込み、「その時々の状況について当事者とともに振り返る」と定義した。さらに、その定義について、簡単でわかりやすい言葉の概念名として「振り返りをしていく」と命名した。

③ データ分析を進める中で、新たな概念を生成し、分析ワークシートは個々の概念ごとに作成する。

分析では、分析焦点者と分析テーマに照らし合わせて、最初に生成した概念の内容とは別の意味のあると思われる箇所も同じように取り上げながら、新たに概念を生成していくこととなる。その場合、分析ワークシートは１シートに１概念という作成方法をとっている。これは、同じシートにいくつもの概念を羅列することで、それぞれの概念に分析者の思考が引きずられてしまう危険性が生じてくるためである。

実際の分析では、文書作成ソフトを活用して、１概念に１ファイルを作成していった。

④ 同時並行で、他の具体例をデータから探し、ワークシートのバリエーション欄に追加記入していく。具体例が豊富に出てこなければ、その概念は有効でないと判断する。

一つの分析ワークシートを完成していくために、他のデータからも同じような意味と思われる具体例を抜き出し、バリエーション欄に転記していく作業を繰り返すこととなる。さらに、概念名や定義については、繰り返しバリエーションを取り上げる作業を通して再検討することとなる。再検討の際には、必ず分析焦点者や分析テーマの観点からデータを確認し、バリエーション同士を比較しながら（継続的比較分析）、より適した概念や定義を完成させていく。

概念１：~~振り返りをしていく~~
　　振り返る
定義：その時々の状況について当事者とともに振り返る

バリエーション
①　でその結果としてまあ不都合が生じた場合にどうそれをフィードバックするかっていうところが非常に大切だと思いますので、まあ、伝えなくて支障が出た、じゃあ今後どうしてったらいいと思いますかっていうところであったりを、その都度振り返っていくというような形をとってます。（L　P1L19）
②　その時の起こっている現象で、振り返りをしていくと言うことは、やはり、非常に重要だというふうには考えています。（L　P1L29）
③　こまめに打ち合わせの時間をとって、まあ、うまくいってないってことを感じているかという確認とあとは、なぜうまく行かないとご本人が考えているのか、（L　P4L10）
④　今、半年に一回は必ず面接するっていうことになっているので、で、半年でどうなったか、その目標に近づいたとか、近づけないとか、（Q　P15L7　概念 20 相談をすると一部共通）
⑤　あの最終的に、ふた開けてみたら「できてるやーん」ってところが、本人の自信につながってくるんですよ。「ほんまや、休まんとこれたわ」みたいな（I　P8L7）

図 2-2-2　分析ワークシート作成例（ポイント③④）

実際の分析では、図 2-2-2 に示しているように、「振り返りをしていく」という概念に適当と思われるバリエーションがデータ内に存在している場合、バリエーションの欄に複数の具体例が転記されることとなる。実際に、バリエーションを集めていく過程の中で、「振り返りをしていく」という概念名よりも、「振り返る」のほうが、当事者とともに支援者も振り返っている様子が伝わりやすいことから、概念名を「振り返る」に変更した。

⑤　生成した概念の完成度は類似例の確認だけでなく、対極例についての比較の観点からデータを見ていくことにより、解釈が恣意的に偏る危険を防ぐ。その結果をワークシートの理論的メモ欄に記入していく。

理論的メモでは、分析ワークシートを作成している途中で浮かんだ疑問や考えについて、その内容を記録として残し、概念名や定義の検討、概念の関係性の検討等を行う際の情報として活用する。特に継続的比較分析の中でも対極例の存在をデータで確認していくことは恣意的な結果を回避できることから、対極例の検討内容を理論的メモに記載しておく。また、この分析ワークシートとは別に、理論ノートを作成し、分析ワークシートには当てはまらないアイデアや分析全体についての思考経過などを記載し、記録として残しておく。

実際の分析における例を挙げると、図 2-2-3 に示しているように、他の概念との対極例として位置づけることや、定義の変更の理由、この概念の関係性などについて、理論的メモに記載している。さらに、図 2-2-4 に示すように、「支援者のアプローチに向けた判断と流れ」と題して理論ノートを作成し、支援者の判断の背景や関係性等について思考した内容を記載している。

概念 18：当事者に積極的に働きかける

定義：当事者に対し、~~の状況に応じて、~~タイミングや個別の特性を念頭におき、~~を見はからい、~~積極的に働きかける。
バリエーション
① ご本人なりに、まあ、対人的な葛藤も含めて、こう失敗っていうことなのかどうかはあれなんですけども、うまくいかないとか、思った、予想通りじゃなかったみたいなことは生じていたりもする訳なんですけどね。やはり、そういうことがあったときに、その、早めに対応ができる（中略）早めにまあ、軌道修正が図れる（L P13L16）
② インテークの段階では当然ご本人のニーズの整理はされていないので、ある程度こちらからこう積極的に働きかけをして、（L P16L9）
③ かなりもっと介入的に入ることもありますよね。（L P20L2）
④ 本人に、（うん）誘導っていうんですかね（フィードバックしてみるわけですね。）うん、じゃあ、こっちの作業やってみる？ってあまり、水を使わない方向にって言うんですかね。（I P19L6）
⑤ 職業センターには、その適性（検査に）いった人で、この人だったらここ大丈夫だろうって探してくれたんですよ。でそこ行ったんだけど、結局、そこだめだったのね。作業の遂行能力がちょっと弱かったのかな。そうすると、だめでしたっていったら、カウンセラーが怒っちゃって、「よし、俺が絶対探してやる」とかいって、ハローワーク行って仕事探して、片っ端から電話して、はい、いってみよう、いってみようって、どんどん連れて行ったケースもある（F P21L10）
理論的メモ
● 「概念 14 当事者の状況応を見守る」の対極例として位置付ける
→ 「積極的働きかける」のか「見守る」のか
● 「概念 29 投げかけをする」を生成し、この概念との対極例として位置付けたことで、定義を変更 20080905、
● 概念 29 とこの概念を質の異なる働きかけとしての対極例とすることにし、この働きかけにつながる概念とし「概念 14 当事者の状況を見守る」を位置付ける。
● 積極的に働きかける時のその要因となるものは何か、
緊急性、認知の変容を促すもの、失敗や不適応など危機介入の意味合い、当事者の個別的な課題によるもの、バリエーションを集める中で整理が必要となる。

図 2-2-3 分析ワークシート作成例（ポイント⑤）

⑥ 生成した概念と他の概念との関係を個々の概念ごとに検討し、関係図にしていく。

概念生成の作業を繰り返し、説明可能な概念として立ち上げ、それぞれの概念同士の関係性を考えてプロセスを図式化する。これらの概念の関係性を考える上で強い関係性にある概念同士をまとめてカテゴリー化し（選択的コーディング）、概念と同様にカテゴリー名を命名する。

実際の分析におけるカテゴリー生成について例を挙げると、「当事者の捉え直しを図る」「マッチングを検討する」「支援の方法や内容を検討する」という 3 つの概念を強い関係性のある概念同士と考え、この 3 つの概念の上位概念として「アプローチを検討する」というカテゴリーを生成している。

概念やカテゴリーの関係性を図式化したものが関係図であるが、この過程に至るまでに、バリエーション同士、概念同士、カテゴリー同士の比較検討を随時行いながら（継続的比較分析）、それぞれの概念やカテゴリーの完成度を高め、概念やカテゴリーの関係性を精緻なものにしていく。その際に、類似概念や対極概念の可能性について検討し、分析する側の解釈が実際のデータに存在しているのかについて、データに立ち返り確認する作業も併せて行っている（理論的サンプリング）。この作業は、関係図

を作成する上でも行っており、実際のデータの内容が関係図の関係に反映されているのかを確認しながら進めていく。

実際の分析における例を挙げると、図 2-2-4 に示すように、概念がいくつか生成できてきた時点で、それぞれの概念の関係性を考え、それまでの理論的メモや理論ノートの思考内容を考慮しながら、図にしていく作業を概念生成と並行して行っている。

理論ノート
支援者のアプローチに向けた判断と検討の流れ

支援者が具体的なアプローチを検討するときに、考慮しているポイントとしては、次の３点が挙げられている。
① 現在の当事者の状況
② 未来（将来）の当事者像 → 支援者が考える、想定する目標・当事者像
③ そのアプローチが、支援が、当事者にとって、どのような意味を持つのか
この３つのポイントを頭に置きながら、アプローチが決まってくる。

この３点をもって、検討していると考えられるが、検討する前段階としての行為として、「状況を把握する」「ニーズを把握する」

すなわち、支援者の当事者に対するアプローチ（見守るのか、なげかけるのか、積極的に働きかける）の前提となっている判断のための好意として、上記３点をすり合わせての検討がなされているということか？
→ アプローチの方法と内容を合わせて検討している。

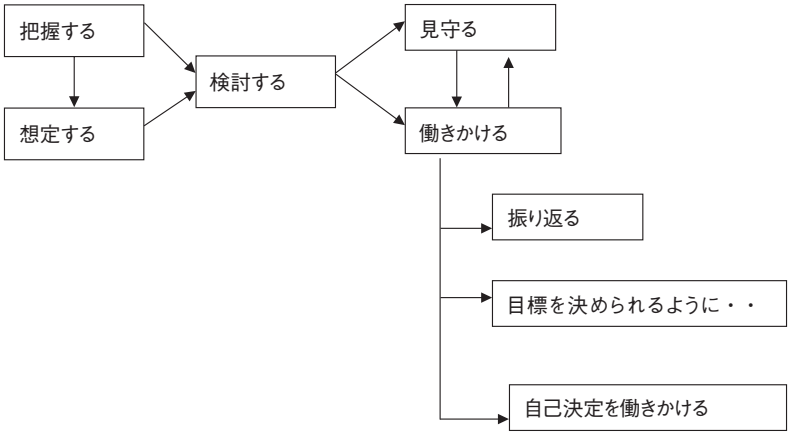


図 2-2-4 理論ノート作成例及び結果図推考例（ポイント⑤⑥）

⑦ 複数の概念の関係からなるカテゴリーを生成し、カテゴリー相互の関係から分析結果をまとめ、その概要を簡潔に文章化し（ストーリーライン）、さらに結果図を作成する。

結果図とともに、生成した概念とカテゴリーを使ってプロセスを簡潔に説明するための文章（ストーリーライン）を作成する。修正版 M-GTA の最終的な分析結果については、結果図と記述説明（ストーリーライン）が主軸になることから、データから得られた言葉の意味をかなり丁寧に検討していく必要がある。

以上のような分析手順を踏みながら、各分析ワークシートの完成度を確認し（小さな理論的飽和化）、この小さな理論的飽和化に達したと判断された概念によって構成されている分析結果全体についての完成度をさらに判断することによって（理論的飽和化）、分析終了となる。

実際の分析では、3つの分析テーマそれぞれについて、結果図を完成させ、分析結果についての記述の順序を明確にしながらストーリーラインを完成することによって分析を終了した。

4　信頼性と妥当性について

分析のスーパービジョンに関しては、初期の分析段階からスーパーバイザーの指導を受け、概念の生成方法から分析結果の取りまとめに至るまで、スーパービジョンを受けた。実際の分析に当たっては、研究員2名の間で、分析テーマや分析焦点者について理解を共有し、データからのバリエーションの抽出及び概念やカテゴリー生成、結果図の作成に至るまで共同で分析作業を進めていった。また、2名の研究員で継続的比較分析及び理論的サンプリングの作業を行っており、分析内容の信頼性と妥当性が保持されるよう努めた。